

コロナ禍における初年次教育の組織的展開 —「自立と体験1」の経験から—

菊地滋夫¹

明星大学

Organizational Developments in the First-Year Experience Under the COVID-19 Pandemic: Learning from the Experiences of *Independence and Experience 1*

Shigeo KIKUCHI

Meisei University

2000年代以降注目されるようになった初年次教育の特徴の一つは、大学、学部、学科などで組織的な取り組みが展開された点にあった。2010年より始まった明星大学の全学必修初年次教育科目「自立と体験1」も大学全体を挙げた取り組みである。コロナ禍に見舞われた2020年度は、「自立と体験1」を企画・運営する明星教育センター(MEC)から担当教員への授業実施方法の連絡は従来以上に高い頻度で行われ、同センター所属教員は担当教員に対して手厚いサポートを実施した。また、担当教員の多様性に配慮して、第1回～第7回までの授業はポートフォリオ(冊子)とLMSによるオンデマンド型で一律に実施された。8回目以降は、LMSを活用したオンデマンドでの実施を基本としながら、多くのクラスではZoomの活用も交えて、より学習を深めたい学生たちに対面に近い形での授業を実施した。担当教員の多様性という現実を踏まえ、無理のない範囲でZoom授業を追加するという弾力的な方策を採用したことで、「自立と体験1」の組織的展開は破綻することなく履修者に学びの機会を提供することができた。様々な制約がある中ではあったが、LMSのレポートの相互閲覧や掲示板などの機能を活用することにより、他学部他学科に所属する多様な学生間の意見交換の機会を持つことができた。LMSが実質的にeポートフォリオとしての機能を担い始めたのも、コロナ禍に伴う2020年度の遠隔授業がもたらした副産物であった。2021年度の「自立と体験1」では、全70クラスがZoomとLMSを組み合わせる形で実施された。コロナ禍の2年間を通して、学習データがデジタル化されたことにより、今後は、学生への指導や授業全体の改善に資するべく、ラーニングアナリティクスやIRへの活用が期待されるほか、対面とデジタルでの学びを包含するファシリテーション(デジタルファシリテーション)が必要になるであろう。だが、全面的ではないものの、対面型の授業も行われ、その教育的価値が改めて見直された2021年度の経験に照らせば、「DXの推進」と「対面での学びのさらなる充実」という、一見したところでは正反対にも思えるベクトルを有機的に統合していくことが望まれると言えよう。

〔キーワード〕：初年次教育、教育の組織的展開、担当教員の多様性、アクティブラーニング、学習データのデジタル化、ラーニングアナリティクス、デジタルファシリテーション、対面での学びのさらなる充実

¹ 明星大学 kikuchis@eleal.meisei-u.ac.jp

1. 本報告の目的

2000年代以降の教育改革に見られる特徴の一つは、大学教育の組織的展開が本格的に開始されたことであろう。筆者が所属する明星大学でも全学的な初年次教育科目の導入に向けた検討が2008年度よりスタートし、2010年度には学部学科横断クラスを最大の特徴とする全学初年次教育科目「自立と体験1」が開講した。学部学科横断クラスを編成して初年次教育に取り組む大学は徐々に増えており、私立大学では、日本大学、京都産業大学、神戸常磐大学、東京家政大学などが、国立大学でも九州大学や大阪大学などが、それぞれ特色ある学部学科横断型初年次教育を実施している。

コロナ禍によって初年次教育が受けた影響や、それを乗り越えるために試みられた方策について報告し、そこからの気づきや発見、教訓などを導き出そうとする際には、この「大学教育の組織的展開」という文脈に留意する必要がある。組織的な取り組みだからこそできることもあれば、組織的な取り組みゆえの困難もあるだろう。明星大学の全学初年次教育は、まさに全学的な取り組みであるだけに、これらが顕著に現れていた。本報告では、コロナ禍により遠隔授業での実施となった2020年度の「自立と体験1」の取り組みを中心に紹介し、気づきや発見、ポストコロナの初年次教育につながる可能性のある知見についても共有する機会としたい。

本報告は、『初年次教育学会誌』第13巻第1号(2021年3月31日発行)の【特集：コロナ禍における初年次教育】に掲載された同名の報告「コロナ禍における初年次教育の組織的展開―「自立と体験1」の経験から―」(菊地滋夫・鈴木浩子著)に基づき、2021年9月12日にZoomによるオンライン開催となった初年次教育学会第14回大会「課題研究活動委員会企画シンポジウム2新型コロナウイルス禍が1年生に与えた影響と今後の初年次教育―大学としての取り組みと会員調査からの知見―」にて行った口頭発表を文章化したものである。しかし、コロナ禍2年目となる2021年度の初年次教育においては、当然ながら前年度とは異なる点も見られた。2020年度は、初回から第8回の授業まではLMSに課題を出して、毎回教員がフィードバックする方式が中心であったが、2021年度は、初回から最終回に至るまでの全15回の授業すべてが、70余りの全クラスでZoomを用いたアクティブラーニング形式で実施されたことも変更点の一つである。本報告では、これらについても言及する。

2. 明星大学の概要

明星大学の開学は1964年である。その母体となった明星実務学校が創立されたのは1923年のことであった。教育目標としては、「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」を掲げている。学部は、理工・人文・経済・情報・教育・経営・デザイン・心理・建築の9学部からなり、大学院には理工・人文・経済・情報・教育・心理の6研究科が設置されている。明星大学には通信課程として、教育学部および大学院教育学研究科がある。通信過程を除く2021年度の学部生は8,476名となっている。所在地は東京都日野市であり、1キャンパスに多様な学部・学科・学系・コースが集積し、体験的な学びや教員養成に特色がある大学とすることができるだろう。

3. 初年次教育とコロナ禍

先にも述べたように、明星大学の全学初年次教育「自立と体験1」の最大の特徴は、学部学科横断クラスの採用である。1クラス約30名の定員で、全体で70余りの学部学科横断クラスが設けられ、2010年以来、学習者の多様性を活かしたアクティブラーニングが展開されている。ここでは、「大学教育の組織的展開」という文脈に留意しながら、初めてコロナ禍に遭遇した2020年度とコロナ禍2年目となる2021年度の「自立と体験1」の実践事例を振り返ってみたい。

(1) コロナ禍の中での初年次教育の実践事例(2020年度)

コロナ禍に見舞われた2020年度の「自立と体験1」は、「遠隔授業においていかにアクティブラーニング型の授業を行うか」という問題に直面した。共通シラバス・共通教材を用いた70もの学部学科横断クラスが展開するこの授業では、教員のICTスキルの多様性が顕在化しやすい。部局によっては、4月からほとんどすべての授業をZoomを用いて同時双方向的に実施したところもあるが、どちらかというともLMSで課題を出すスタイルの遠隔授業を実施する部局が多い中で、70クラスの全担当教員が「Zoomでブレイクアウトセッションを実施」するのは無理だろうと考えられたのである。加えて、学生のインターネット環境やデバイスもまちまちであったこともあり、「自立と体験1」は当面LMSで課題を出し、担当教員がフィードバックする方式を軸に進めることになった。当然ながら、この方式では約2,100名の新入生が学内に人間関係を築くのは困難になることが危惧された。担当教員の多様性を理解しつつ、新生を明星大学に迎え入れ、一人ひとりがこの大学で学ぶ意味を考えるためにどうすれば良いのか？ 初年次教育の真価が問われることになったのである。

2020年度の明星大学の教育活動は、「学生・教職員の生命と身体的安全確保」と「学生の学修機会の保障」の両立を目指して実施されることになった。授業の実施方法は、LMS(manaba)に課題を出す方式とZoomによるものとに大別され、教員の判断で選択し、併用も可であった。準備期間を経て4月22日より授業が開始され、前期中に対面授業を実施できる可能性を探ったものの、結局、前期は「実験科目」「実習科目」のみ集中講義形式で対面授業が実施されたに留まった。これらに加え、コロナの感染拡大状況の動向を睨みながら、後期は一部の講義科目なども対面での試行が行われるようになった。

1年次必修科目としての「自立と体験1」は、専任・常勤・特任および数名の非常勤講師によって担当され、各クラスに1～2名のSAが配置されるのが通例である。しかし、2020年度はSAの配置は行われなかった。この科目の教育目標は「明星大学に学ぶ学生としての自己理解を助け、各自の理想や目的を明確にしていくこと」であり、到達目標としては「他者との関わりを通して自己理解を深め、明星大学で学ぶ自分自身を理解すること」であった。授業内容は、「自己理解」「人と関わる力・考える力」「自校学習」「キャリア形成」などからなる。各階の授業は、体験(個人で考える→グループで話し合う→全体で共有する)と振り返り(ポートフォリオへの記入)が基本である。教員が説明する時間、学生たちが一人ひとり静かに考える時間、ポートフォリオにペンを走らせる時間、グループで話し合う時間、模造紙にアイデアをまとめる時間、クラス全体に向けて発表する時間など、教案では90分の授業時間が区分されて組み立てられていた。メリハリの効いた活気ある学びの場。それがかつての「自立と体験1」であった。

しかし、コロナ禍により、「自立と体験1」は LMS とポートフォリオ(冊子)を組み合わせで実施され、明星教育センター(MEC)所属教員が学部選出教員を手厚くサポートした。9回目以降の授業では、クラスによっては Zoom を併用することになり、1回以上 Zoom を用いたクラスは、70 クラス中 53 クラスとなった。教員によって Zoom 授業への習熟度が異なるため、一斉実施を見送ったのである。その結果、幸いにもトラブルというトラブルはなく、その意味では、無理のない授業運営が可能になったと評価することができる。

また、後半の数回を除いて、ブレイクアウトセッションなどを交えた Zoom による同時双方向授業が実施できないという制限があったとはいえ、この科目の授業運営の中心を担う明星教育センター所属教員により、ある程度のアクティブラーニングが行われた。LMS のレポート機能を相互閲覧可に設定することで、クラスメイトが互いの記述内容を読みコメントする内容や、掲示板やプロジェクト機能を活用して、他者の考えに触れることも推奨された。対面で実施されていた 2019 年までの「自立と体験1」では、全 15 回の授業のうち、学生が記入したポートフォリオに担当教員がコメントを返すのは 3,4 回程度であったのに対して、コロナ禍の 2020 年度は LMS を通してほぼ毎回フィードバックすることになったため、学生と教員との双方向的なやりとりは、ある面で従来以上に密になったとも言える。非対面授業ではあっても、学生が多様な他者の考えに触れ、主体的に考え、相互に交流する「自立と体験1」の特徴をどうにか活かそうという工夫がなされていたのである。

組織的展開と個別展開のバランスに関して言えば、LMS のレポート課題等のひな形は基本的に MEC 教員が提供する一方で、その修正や追加、学生へのフィードバックは担当教員に委ねられており、概ねバランスは取れていたと思われる。担当教員へのアンケート調査によれば、MEC が提供したレポート課題やコースニュース等をそのまま利用していた教員は 58.5%であるのに対して、工夫・改善したことがあると回答した教員は 41.5%であった。また、役に立ったサポートとしては、「コースニュース(案)の提示」83%、「レポート課題のインプット」86%、「授業実施情報の提供」71%などが挙げられていた。組織的に展開することをベースとしながらも、個別展開の裁量が緩やかに認められていたことにより、安心感が得られるとともに、教員個々の工夫も活かされていたと見ることができるだろう。

他方、学生たちの声に耳を傾けると、別の側面も浮かび上がってくる。この授業に参加して良かったと思う点として、「LMS 課題を通して他学部の学生の意見を知ることができた」「相互閲覧で他の人のレポートが読める」などが挙げられる一方で、「文字だけでは伝わらない」「対面だったら良かった」「Zoom をもっと使ったら良かった」「自分のクラスでは Zoom を使っていないので交流が少なかった」「全部のクラスで Zoom を使って欲しかった」などの意見も多数寄せられた。9回目以降の授業で Zoom を利用したクラスに比べて、LMS のみのクラスでは「自立と体験1」の特徴である「少人数クラス」「他学部・他学科の学生との交流」「グループでの学習活動」の有効性を問う設問への肯定的評価は相対的に低かった。これは次年度へ向けての改善の手がかりとなった。

(2) コロナ禍 2 年目の実践 (2021 年度)

明星大学では、2021 年度前期は前年度後期以上に対面授業が増えたが、「自立と体験1」は、全 70 クラスが Zoom と LMS を組み合わせる形で実施された。少人数の授業向けの

教室の多くが、Zoomを用いた授業を受けるための教室として利用されるなどの事情で、「自立と体験1」を対面で実施するに足る教室が十分に確保できなかったためである。同時に、前年度の後期には、明星大学でもZoomを利用した授業科目が大幅に増加しており、Zoomの操作にある程度習熟した教員が増えていたという背景もあり、それほど心配しなくても、全70クラスを初回からZoomをフル活用した授業にすることができたという側面もある。

こうして、対面ではなかったものの、「自立と体験1」は、ブレイクアウトセッションなどを活用することで、前年度に比べれば、はるかに学生間の対話がある授業となった。さらに、前年度はSAの配置はなかったが、2021年度は70クラスすべてにSAによるサポートが入ることになり、コロナ禍の中で初年次生たちが学びを深める上で、先輩たちの存在は明らかに大きな力になってくれた。筆者が担当したクラスの学生たちからは、「〇〇先輩がいつも授業を盛り上げてくれるおかげで、楽しく授業ができました」「〇〇先輩の明るい雰囲気で面白く、とても楽しい授業でした」「〇〇先輩も面白くて、優しくて授業に参加しやすかったです」などの声が多数寄せられた。事前に研修を受けたSAの配置は、「自立と体験1」の特徴でもある、組織的運営の強みが発揮されたと見ることができる。

諸般の事情により、全面的にオンラインでの実施となったコロナ禍2年目の「自立と体験1」ではあったが、全体的に前年度よりもはるかに充実した内容であったことは確かである。ただし、だからと言って「ポストコロナの時代が訪れても、初年次教育はオンラインのみで十分」と結論づけるのは早計であろう。この点は、本発表の最後に改めて触れたい。

4. DXと初年次教育の課題

コロナ禍により、大学の教育、研究、その他の業務がDX、すなわちデジタルトランスフォーメーションに向けて動き出したのは間違いない。教育の分野では、おそらくほとんどの大学で、学習データがLMSなどを通してデジタル化されるといった変化が見られた。授業科目での指導はもとより、学修者にとって意義のある学習データの活用方法の整備、学生支援や教学マネジメントに資するラーニングアナリティクスやIRへの活用は、今後の重要課題として、すでに多くの大学で認識されていることだろう。

こうした流れにあって、教育において最も重要なキーワードの一つになると考えられるのは、田原真人氏が提唱する「デジタルファシリテーション」である(田原, 2020)。初年次教育は、高等教育におけるアクティブラーニング導入の入り口として機能してきたということもあり、教員が一方的に教えるというよりも、学生によるグループワークが盛んに取り入れられてきた経緯があり、その中ではファシリテーションが重視されてきた。しかし、コロナ禍を経験した今になって振り返ってみると、それは教室における対面での場面に限定されがちだったことがわかる。だが、デジタルでの学びの長所が認識され、高等教育に積極的に取り入れられる時代になると、ファシリテーションは、対面での学びの場のみならず、デジタルでの学びの領域へと拡大されることになる。反転授業における事前の動画視聴や、授業時間外にLMSの掲示板などを利用して学生たちが意見交換する場合のファシリテーションなどは、今後ますます重要になるであろう。

しかし、全面的ではないものの、遠隔授業とともに対面授業が再開されるようになった2021年度は、対面で実施する授業の教育的価値が、予想や想像の域を超えて、確たるリ

アリティを伴いながら再認識された年でもあったことも忘れてはならない。とりわけ初年次教育というコンテキストで言えば、視覚や聴覚に限定されがちだった遠隔授業とは明らかに異なり、トータルな身体的な感覚とともに、キャンパスで新たに出会う多様な他者を受け容れ、自分自身もまた他者に受け容れられながら学ぶという経験が、初年次生にとってどれほど重要なインパクトを与えるのかについて、すべての大学人は再認識すべきであろう。

さらに言えば、このような経験は、学生時代のみならず、その後の人生にも少なからぬ影響を与えるのではないだろうか。人類学者・霊長類学者である山極壽一氏は次のように述べている。「やっぱり相手と同じ場を共有して対面している状況は、緊張感があるし、互いの言うことを信じたり疑ったりしながら、リアルな関係を築いている。大学のゼミなどは、相手の表情や雰囲気を読みながら、暗黙知が飛び交い議論が深まっていくものですしね」(山極, 2021)。こうした濃密な知的経験への入り口として重要な役割を担う初年次教育は、「DXの推進」と「対面での学びのさらなる充実」という、一見したところでは正反対にも思えるベクトルを有機的に統合していかななくてはならない。けっして容易ではないが、果敢にチャレンジする価値のある課題であると受け止めたい。

参考文献

- 菊地滋夫・鈴木浩子(2021)「コロナ禍における初年次教育の組織的展開―「自立と体験1」の経験から―」『初年次教育学会誌』, 13(1), 19-25.
- 明星大学(2021)『全学共通必修科目「自立と体験1」新入生2,105名×全学横断のグループワークをオンラインで成立させた舞台裏』<https://www.meisei-u.ac.jp/note/20200731-01.html> (2021年9月8日アクセス)
- 田原真人(2021)『デジタルファシリテーション構想(デジファシ構想1)』<https://note.com/masatotahara/n/n2ed3a780852f> (2021年9月9日アクセス)
- 山極壽一(2021)「ニューノーマルをつくる世代に伝えたい体感と対話のある学びの面白さ」『国立大学』, 59. https://www.janu.jp/wp/wp-content/uploads/2021/03/janu_vol59.pdf (2021年9月9日アクセス)